



山陽スピリット ニュース No.30

2023(令和5)年3月15日

発行：学校法人 山陽学園 山陽スピリット推進室

「愛と奉仕」について — 思うことや思い出すことなど —

山陽学園大学・山陽学園短期大学
副学長 北岡 宏章



本年3月末をもって山陽学園を退職する。少し前に山陽スピリットニュース掲載原稿のご依頼を受けて何を書こうか大いに迷ったのだが、本学園の教育理念である「愛と奉仕」について思うところや思い出すところを少しばかり書いてみることにした。というのも、自分のこれまでの教員生活で、結局のところ一番大切だと考えるに至ったことが「愛と奉仕」の理念にかなり近いと思われるからである。

更にまた、自分が中・高6年間をカトリック系の学校に通い、クリスチャンではないものの、キリスト教の考え方にある程度接しながら育ったこともその理由である。入学式や卒業式、その他諸々の式典は半時間ほどの短いミサでもって始まるのが通例であった。中学1・2年生のときには道德の代わりに宗教の時間があって、聖書の梗概を学習した。中2を最後に終わってしまったが、クリスマス・イブには深夜にミサとタブロー（＝活人画、生徒が舞台上で聖書の場面を再現し、その間に聖書の該当箇所を読み上げられる）があり、その後は朝まで音楽の演奏やゲームなどがあって、夜を徹して楽しくお祝いした。懐かしい思い出である。教職員に神父や修道士がおられ、尊敬できる多くの方々に出会えた。特に

印象に残っているのがペペンさん、ツペンさんというお二人の修道士である（名前は似ているが、別に兄弟ではない）。確かカナダから来られ、学校の設備保守を担当されていた。いつも梯子をかついで、笑顔を絶やさず勤勉に働いておられた。キリスト教には本来、神が我々を愛されるように我々は互いに愛し合わねばならないとする隣人愛の教えがある。お二人は遠い異国へ来られ、地味な日々の仕事への献身の中で、学園や生徒への愛を実践し体現されていた。当時のことを思い返すと、今でもその顔がすぐまぶたに浮かんでくる。

更に加えて、教育学の研究に進んでから研究対象とした教育思想家が、たまたまではあるがキリスト教思想に関しても活躍した人々であった。最初にその大学教育論に取り組んだJ.H.

J.H. ニューマン¹⁾

ニューマンは、オックスフォード運動とよばれる英国教会内で行われた信仰復興と教会改革の運動の指導者でもあった。次いでその教養論に魅かれた

M.アーノルドは、自然科学の急速な進展がキリスト教の従来への教えに深刻な懐疑をもたらしている時期にあつて、それでも聖書の教えに安心してとどまってよい根拠を、聖書解釈を通じて示そうとした。更に最近その自由教育の考え方と背後にある世界観を考察しているJ.ピーパーは、本来カトリックの著名な哲学者である。

ここで前書きは終えようと思ったのだが、よく考えるともう一つあつた。私が最初に教職についた大阪府立工業高専の一般教養科ドイツ語研究室の先輩たちの多くが、京都大学文学部キリスト教講座出身の方々であつた。開設メンバーで、私が奉職したときの上司であつた高野晃兆先生は、プロテスタントの神学者で宗教社会学者でもあつたE.トレルチの研究者で、大阪府立高専の管理職と京都大学ボート部のコーチ（のちに監督）を兼ねて大変多忙な日々を過ごされながらも、空いた時間にこつこつ研究を積み重ねられ、退任後学位論文を提出して博士号を取得されるとともに、トレルチの主著である『キリスト教会および集団の社会理論』の古代および中世の部分の立派な翻訳を出版された。私が専任講師の時、非常勤講師としておいでいただいていた芦名定道先生は、哲学と神学の深い統合を目指した神学者P.ティリヒの研究で知られているが、キリスト教と現代社会とのかかわりも積極的に取り上げられ、『脳科学とキリスト教』などの著作もある。昨年京都大学を定年になられ、関西学院大学神学部へ移られた。芦名先生の後には非常勤講師でおいでいただいた信岡茂浩先生は、その後日本基督教団の牧師になられ、関西一円で活躍されている。また私の直接の前任者であつた野々村昇先生は、キリスト教的な深い愛をもって恵まれない子どもたちの教育に尽力したペスタロッタの研究者で、大阪府立高専から長崎の活水女子大学に移られ、後に学長・学園長を務められた。

今思い返せば、本当にたまたまであるが、これま

でいろいろなところでクリスチャンの方々やキリスト教と関わりのある人生であつた。そうした機会にもっと理解を深めておかなかつたことが今更ながら悔やまれるが、教員生活の最後に「愛と奉仕」を教育理念に掲げる本学園に奉職できたのも、きっと何かの御縁であろう。ただ、クリスチャンの方々に比べると、私のキリスト教理解など極めて浅く狭いものに過ぎないが、学園開設当初と異なり、昨今本学に学ぶ学生の皆さんの大半が非宗教系の学校で育たれ、聖書やキリスト教になじみが薄いこともあり、私のように、クリスチャンの方々とキリスト教には全く縁のない方々との間に位置する人間の考えを示すことも、卒業生や在校生の皆さんの「愛と奉仕」に関する理解を進めるうえで多少ともお役に立つかもしれないと思い、あえてこのテーマを選んだ次第である。

さて、「愛と奉仕」は、今日では一般的・普遍的な美德と考えられるであろうし、また本学でも、今では特にキリスト教と関係づけて教えてはいないが、ルーツはキリスト教にある。そもそもキリスト教は「愛の宗教」とも呼ばれているのである。なぜか。

ローマ帝国の片隅のパレスチナの地で始まったキリスト教が、様々な迫害に耐えながら信徒を増やし、ついにはローマ帝国公認の宗教となつたことは、世界史で学ばれたことであろう。古代ギリシアから民主政期のローマ、さらにはローマ帝国へとつながる古代世界は西洋文明の礎であり出発点であるが、その古代世界では、強さ、賢明さ、美しさ、豊かさなどポジティブな価値を所有することが徳(arete)として称揚される（例えば、ホメロスの『イリアス』を想起されればよい）一方で、こうした価値を欠く者、弱い者は蔑まれ、踏みつけられた。しかも、そうした弱い者に同情することも、心の弱さを示す証左として軽んじられていたのであつた。そのような古代世界において、人間性の発展がある種行き詰まり状

態に陥っていたときに（このあたりの記述は、人類の歴史を人間性の発展から捉え、そのことの理解とその発展・普及のための努力を「教養」と呼んだM.

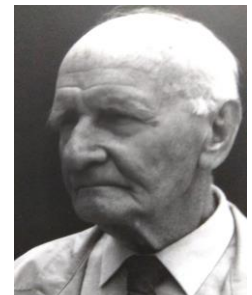
M. アーノルド²⁾

アーノルドの説に依拠する)、当時の人々の人間観や価値観、さらには人生観に大きな転換をもたらしたのがイエス・キリストの教えであった。新約聖書は、イエスが示した弱い虐げられた人々への慈しみや寄り添いととも、力や富や権威を所有し驕れる者たちへの厳しい叱責や諭しの例に満ちているのである。

先にキリスト教が「愛の宗教」と言われていることにふれた。神が人類を救うためにそのひとり子イエスをこの世に賜ったこと自体が、そもそもこの上もなく大きな愛のわざであるが、イエスの範によって目覚め、自らも他者を慈しみ、他者のために図ろうと努めることが、神の深く広い愛に応え、何よりも神を愛することになる。キリスト教の源流である古代ユダヤ教は、人間として正しく生きる（聖書ではしばしば「義」という言葉で示される）ことが人間としての生を高揚させ、神に嘉される所以だったが、そのことをおもに神の命じるところ(=律法)に厳格に従うことや、様々な宗教的儀式を正確に執り行うことの内に求めた。イエスはそのような古代ユダヤ教における形式的・外面的な義の捉え方を内面に向け返させた。すなわち、その言葉や模範によって、人々に自らの生き方を省み、改めさせ（聖書には「悔い改めよ」という言葉が極めて頻繁に現れる）、延いてはその言動が聖書を通じて世界に伝わることで、人類的規模で、人間性の発展の向かうべき方向を指し示すことになった。『キリストに倣いて』という有名な書物もあるが、イエスの言行に心打たれ、自らの生き方を省みることは、クリスチャ

ンならざる我々の多くにとっても大変意義深いことではないだろうか。そのためにも、卒業生・在学生の皆様には、もしまだであれば、人生において一度は聖書（特に新約聖書）を読んでみられることを、修養という観点からだけでも心からお勧めしたい。

私は教育学が専門なので、この際教育愛についても少し触れておきたい。耳慣れない言葉かもしれないが、教育愛とは、肉親の愛や男女の愛とは異なり、教育者が被教育者に対し示す愛である。通常、二種類の教育愛が挙げられる。ひとつはerosである。プラトンの『饗宴』に典型的に示されているが、ギリシア的な性格を持った、より高いものを求める愛であり、それゆえ優れた者を優れているがゆえにより一層愛する愛であり、そうしたことから「向上愛」とも言われる。これに対しもうひとつの愛はagapeである。これもギリシア語で愛を意味するのであるが、神が人類全体を救おうと自らのひとり子イエスを地上に送られたように無条件に

J. ピーパー³⁾

包み込む愛を意味し、「向下愛」とも言われ、キリスト教的愛とされる。教育に携わる者としてはeros的に被教育者を向上させ、より高いところへ導くことが必要であるのは言うまでもないが、その前提として、被教育者をそのまま受容し、教育者としての愛情を注ぐagape的な愛がまずは求められよう。被教育者はこの愛を感じることで、教育者に安心して心を開き、その結果さまざまな教えや示範を受け入れられるようになるのである。

私はこれまで37年間にわたり高専や短大や大学で教員として働いてきた。浅学菲才で大したことは何もできなかったが、割と早い時期からその重要性を感じ、その後経験が増すにつれてますます大切だと思ふようになったことがある。それは困っている

人や学生がいればともかく手を差し伸べるということである。相手は同僚やご近所様やたまたま電車で乗り合わせた人、道で出会う人も含めてであるが、教員としては、特に目の前で困っている学生や明らかにそう思える学生には必ず声をかけ、自分にできることなら援助や助言を躊躇なくするよう努めてきた。ささやかなことであり、これを教育愛と呼ぶのは気恥ずかしいので、育ちゆく若い人、その過程で困難に直面しもがいている人への共感と同情と言っておこう。自分の小さな支援や励ましが役立って、彼らが困難を乗り越えたりあるいは目標を何とか達成できたりしたときに見せてくれた笑顔は、何ものにも代えがたかった。相手を助けたというよりも、それによってこちらが喜びを与えられ、むしろ大きく力づけられた。年を取るにつれ、人生に意味を与えてくれるものは決して地位や名誉や富ではなく—もっとも私の場合、そのいずれとも縁はなかったが一ささやかな支援や助言をさせてもらった人たちが見せてくれる笑顔であると思うようになった。教員生活の最後に「愛と奉仕」を教育理念とする山陽学園で勤務させて頂けたことに心から感謝し、本学のますますの御発展ならびに同窓会員皆様のさらなる御健康、御多幸および御活躍をお祈り申し上げます。

1) J. H. ニューマン(John Henry Newman, 1801~1890)

肖像画は研究社英米文学評伝叢書47「ニューマン」石田憲治著より
著書には大学教育論“The Idea of a University”、
自らの宗教的立場と前半生について書かれた“Apologia pro vita
sua” (その生涯の弁明) などがある。

2) M. アーノルド(Matthew Arnold, 1822~1888)

写真は“Matthew Arnold — A Life” Park Honan 著より
著書には代表的な教養論として“Culture and Anarchy”、
文学批評として“Essays in Criticism”、
宗教論として“Literature and Dogma” などがある。

3) J. ピーパー(Josef Pieper, 1904~1997)

肖像画はインターネット(open source)より
著書には“Muße und Kult” (閑暇と祝祭)、
“Glück und Kontemplation” (幸福と観想)
“Über die Liebe” (愛について) などがある。

上代淑先生遺訓「日々のおしえ」

上代淑先生は1889年に山陽英和女学校に着任し、1959年にこの世を去るまで山陽学園のために尽力なさいました。

「日々のおしえ」は、社会に出て役立つ人間になるようにとの教えを分かりやすくまとめた、日めくり(1日~31日)の言葉です。この上代淑先生の遺訓は、時代を越えて卒業生の心を励ましてくれています。

- (1日) 美しい日は美しい月を 美しい月は美しい年を
美しい年は美しい生涯を
- (2日) 清く正しく あかるく強く 心に愛を育てよう
- (3日) 夜の眠りに「明日こそは」 朝のめざめに「今日こそは」
- (4日) さわやかな挨拶 あかるい一日
- (5日) 人のために尽くす事こそ 私達のよるこびである
- (6日) 重荷を負う人に 手をかしましよ喜んで
- (7日) 近所隣へ思いやり 愛の種を蒔きましよう
- (8日) 事ごとに感謝し 祈りましよう
- (9日) 車掌さんにも 運転手さんにも「ありがとう」
- (10日) 老人や体の不自由な人に すずんで席をゆずりましよう
- (11日) 与えた親切忘れても 受けた親切大きく感謝
- (12日) 辛抱第一何くそで
- (13日) はたらけはたらけ 苦勞は心の糧になる
- (14日) 「から手であるな」首をひねって手を働かせ
- (15日) あたえられた仕事は 五〇センチ向こうまで
- (16日) さっさ せっせと働こう 手のあれたのはあなたの誇り
- (17日) あなたの最善今すぐに
- (18日) 美しい行いは 美しい心から
- (19日) ねたまず 憎まず たかぶらず
- (20日) 逢う人ごとにやさしい思いと やさしい行いを
- (21日) 礼儀正しく清潔に 言葉づかいはていねいに
- (22日) 素直な心で明るい返事
- (23日) 無駄なおしゃべり禍のもと
- (24日) 道や広場を清潔に
- (25日) 整頓は人目につかぬところまで
- (26日) 物の命を大切に
- (27日) いらぬガス消せ電気消せ 水一滴もむだにすな
- (28日) 使ったものは元の場合へ 借りた品物すぐ返せ
- (29日) 「アイロン・スイッチ」 「アイロン・スイッチ」
これ忘れたら大火事だ
- (30日) いつでも後をふりかえれ しのこさないか 戸締まりよいか
- (31日) 広い大空のように ゆたかな心を

(山陽スピリット推進室)